

研修成果報告書

「夜の街歩きスタディーツアー」

研修成果報告書

「夜の街歩きスタディーツアー」に参加

研修日時 2014年12月11日

訪問先 新宿・歌舞伎町 秋葉原・電気街

1. 研修内容

家庭や学校で「居場所がない」と感じる少女たちが、「JK（女子高生）」を売りにする性被害に巻き込まれている。少女たちの多くが「JK リフレ」や「JK お散歩」と呼ばれる「JK 産業」で働いている。JK リフレとは、女子高生が個室で肩もみなどをし、オプションで添い寝やハグ、お触りができるサービスのことだ。JK お散歩とは、女子高生と客がデートを行うサービスのことだ。そして JK 産業で働く女子高生たちは現場で性被害に巻き込まれるケースや将来的に性風俗や水商売に転向する者も少ない。

こうした状況に課題意識を抱く、一般社団法人 Colabo では「夜の街歩きスタディーツアー」と題して、新宿・渋谷・池袋・秋葉原・町田などの夜の街を歩き、女子高生を取り巻く問題やその危険性を知るためのスタディーツアーを行っている。今回は新宿・歌舞伎町と秋葉原を案内していただいた。

2. 新宿・歌舞伎町にて

夜の街の代名詞ともいえる歌舞伎町。多くの飲食店や風俗店が軒を連ねる、この街で目立つのは道の片隅でたたずむスーツ姿の男性達の姿だ。実は彼らが女子高生に声をかけるスカウトマンだ。巧みな話術で声をかけ、連絡先を聞き出して仕事を提供する。例えば、上京して間もなく今夜帰る場所がない少女に対しては「寮完備の店に体験入店するのはどうか？」と誘う。もしくは「スマートフォンがてらカフェで男性とお話をするだけでお金がもらえるよ」と誘う。実はこれも「JK カフェ」と呼ばれる JK 産業のひとつである。少女たちのニーズを巧みに汲み取り、ビジネスとして成り立たせる。歌舞伎町には少女たちが JK 産業に足を踏み入れやすいような入口が数多く存在する。

『スカウトマンは少女達を見抜く目が肥えている』と、ツアーを担当してくださった Colabo の稲葉さんは言う。少女の身なりや持ち物や雰囲気、会話の様子から年齢や少女が置かれた状況を見抜いていく。夕方から夜にかけて新宿駅東口から歌舞伎町に通じる大通りは少女達だけでなく、多くの若者でごった返

研修成果報告書

「夜の街歩きスタディーツアー」

す。スカウトマン達は大通りの道端にたたずみ、目をくまなく動かしながら、釣れそうな少女を探しているようだった。

普段、私が歌舞伎町に訪れる機会は仲間との飲み会くらいだ。道端にたたずむ、いかにも強面なスーツ姿の男性達を気付いてはいたが、私は居酒屋のキャッチだろうと思い込んでいた。こんなにも身近なところにJK産業に通じる入口があるのかという驚きと、ツアーのなかで現場の実情を知れば知るほどに私自身の目が肥えてくる感覚を抱いた。キャリーバッグを持ちひとり道端で立っている少女、ホテル街に駐車しているフルスモークのワンボックス車（デリバリーヘルスの送迎車）、風俗案内所 etc. どれも歌舞伎町を構成する要素のひとつだ。実際に目にしているだけでも、その裏側にある背景や情報を知らないで見過ごしてしまうと痛感した歌舞伎町でのツアーであった。

3. 秋葉原・電気街にて

一昔前まではメイド服を着た女性達がビラ配りをするイメージが強かった秋葉原。近年では女子高生の制服を着た女性達がひしめき合う場所がある。そこは通称「ツクモ通り」秋葉原駅電気街口を出て中央通りの一本裏手にある場所だ。

「女子高生とご飯ができますよ〜！」と道行く男性に声をかけている。ビラ配りをしているので私もビラをもらって見た。飲み放題で2000円と書かれている。確かな年齢は分からないが、10代後半に見える。思わず「本当に女子高生が働いているの？」と聞いてしまったが、「逆に私がいくつに見えますか？本当に女子高生ですよ」と返されてしまい、たじろいでしまった。確かに顔立ちは幼い。少女は高校2年生だそうだ。なぜこんな夜遅い時間帯に女子高生が路上に立っているのかという驚きと、夜21時台に制服を着た女子高生が路上で客引きをする光景はとても異様だった。

他にも観光客の男性や仕事帰りのサラリーマンが少女達と話をしていた。どんな話をしているのかなと思い、近くで立ち聞きしてみた。「その制服は学校のものなの？」との問いかけに、「これはお店のもの。他の女の子によっては本物の自分の高校の制服を着ている人もいる」とのこと。秋葉原は人通りも激しく、不特定多数の大衆に自らの高校の制服を晒すことで身バレする危険性もあるはず。稲葉さん曰く、少女によっては地元まで追いかけられ危険な目に遭うケースもあるそうだ。少女達は危機意識を抱かないのかと不安に感じた。なかでも

研修成果報告書

「夜の街歩きスタディーツアー」

印象的だったのは、「こんな夜遅くの寒い日に仕事するのは辛くない？この仕事をしていて楽しい？」との問いかけに、「楽しくない。ただ辛いだけ」と答える少女の姿だ。どこか寂しげな表情で本音を漏らした姿に、この仕事に行き着くまでに彼女の身にどんな出来事があったのだろうかと思い巡らせてしまった。また、ツクモ通りの路上には少女達を監視する店の男性スタッフが常に視線を送っている。ビラ配りの邪魔や、店は利用せず長々と少女に話しかけるだけの人々（通称「ゴキブリ」）を撃退する役割があるそうだ。路上で客引きをすることを「立ちんぼ」という。寒空の下、立ちんぼをする少女が発した「楽しくない」との本音に触れた秋葉原でのツアーであった。

4. ビジネスモデルとしての JK 産業

JK 産業の仕組みは非常によく出来ている。若い少女達が魅力を感じるようなうたい文句が店舗ホームページの求人案内に並んでいる。例えば、ある JK カフェ店には「待遇充実! 日払い OK 上下関係自由 服装髪型自由 出勤自由」と書かれている。現場では本当にこの言葉通りになるのか、疑問に思うところもあるが、この自由度の高さは魅力的に感じるはずだ。なぜここまで創意工夫を重ねて少女を囲もうとするのか。店舗のスタッフは何のためにこの仕事をしているのかと、稲葉さんに質問をした。答えは、この仕事がお金を稼げるから。店長クラスになると月に数百万円ほど稼げるとのこと。その売上から少女達にどれだけバックされているかは分からない。実際は歩合制の現場だ（職種にはよると思うが）。入店初日は約束通りの給料を支払うが、2 回目からは違う。自分で客を連れて来いと言われる。店舗には指名ランキングが掲げられ、少女達の競争心を掻き立てる。客に多く指名されるためには、通常のオプションよりも過激なオプションを提供するほうが指名されやすい。少女達が魅力的に感じるような求人案内の裏側には、大人達が考えた巧妙なカラクリがある。

スタディーツアーに参加する旨を友人に伝えたときに、何気ない一言が返ってきた。「自分から進んでこの仕事をやろうと女の子は集まっているでしょ」と。友人の一言のように、少女が自分から進んで選んで JK 産業で働いていると思われがちだが実際は違う。大人が子どもを巧妙なカラクリで集めて、商品化をし、その商品を大人が買っている。「女子高生」というブランドを媒介にして需要と供給が成り立ってしまう、日本男性の乱れた性意識に対して怒りを覚えた。